

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

On the Chancay Culture in the Central Andes and the Collection of Amano Museum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004622

そのためにかならず館長の天野氏自身か館員が説明をすることになっている。現在は日本語とスペイン語で解説を行っているが、その内容は展示品に関するありきたりの説明だけではなく、天野氏も書いているように『学者たちの書く立派な書物を見ると、年代の順序とか、遺跡の構造、遺物の特徴などは整然と書かれているが、遺跡の構造はどのような意味を持っているのか、土器や織物の文様に古代のインディオがどのような心をこめているか、などはふれていない。もちろん慎重な先生方がふれたがらない気持ちはよくわかる。しかしこういうことがわからなくては、古代文化の本当の意義は理解できないではないか。この研究者のさわりたがらない部分を、今につきとめてやろう、などと思ったものです』[天野 1975] という精神で、時には天野氏独特の解釈を混じえて、滅び去った古代アンデス文明への愛情のこもった説明がなされるのである。特に、天野氏が長年手がけているチャンカイ文化に関しては、その多くを自身の手でとりあげているだけに一そう説明に熱がこもり、見学者は知らず知らずの中に魅せられてしまう。

この説明をさらに効果的にするために、本館では展示方法にも工夫がこらされている。すなわち、ほとんどすべての遺物を直接手にとって見るができるということである。博物館の展示といえば、鍵のかかったケースのガラス越しに見るか、かならず「お手を触れないで下さい」と書いてあるのが普通であろう。本館では、例えば笛になっている双胴壺の説明の場合「これは中が特殊な構造になっていて、水を注ぐ時音が出ます」というだけではなく、実際にケースから出して鳴らしてみせる。また、鈴などの楽器もケースから出してその音を聞くことができる。そのため、ケースは天

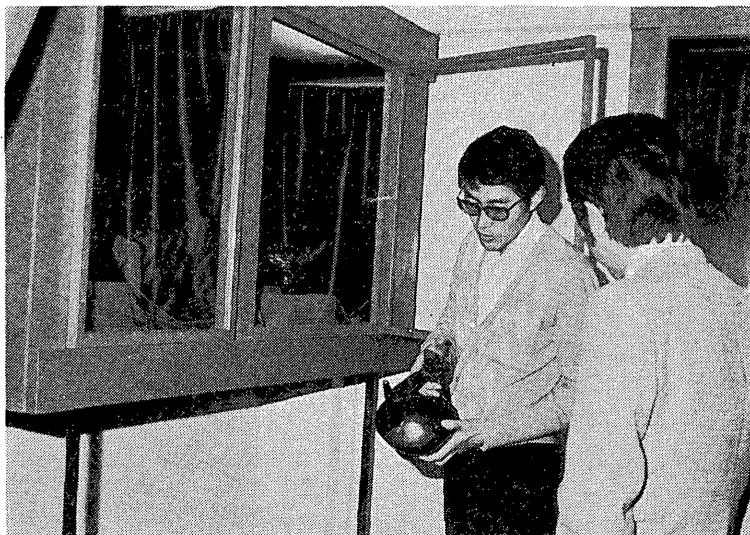


写真 11

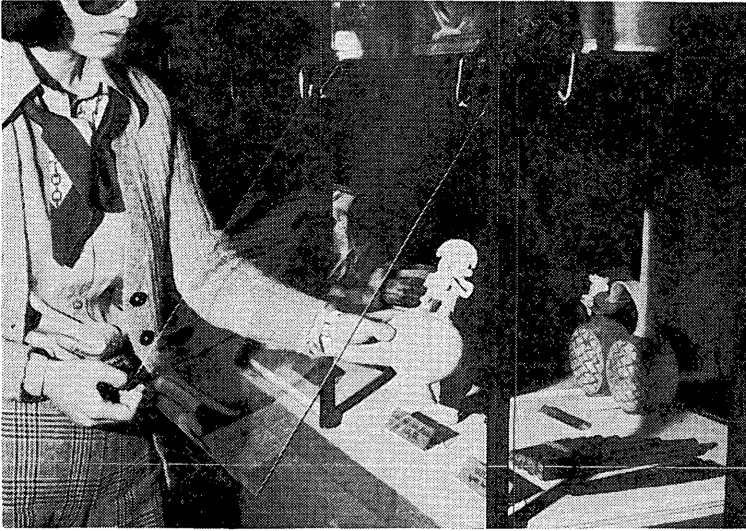


写真 12

野氏の設計により特別に作製されたものを使用している。第1展示室の壁沿いのものは、一見嵌め殺しのガラスのように見えるが、はぞとはぞ穴だけで止まっているので簡単に明けることができる(写真11)。中央のケースは、鉄製の枠組みに上に2つの小孔のあいたガラス板をフックで吊り下げただけのもので、ガラスは簡単に手前に開き中のものが取り出せるようになっている(写真12)。このまさにカーテンウォール式ともいべきケースは、当初展示品を簡単に取出すために考えられたものであったが、数年前リマ市にかなり大きな地震があった時に吊ガラスが振動を吸収したためか、被害は皆無で予想外の効果があったことがわかったという。以上は第1展示室に関するものであるが、第2展示室に関しても、引出しに収めてあるものはもちろん、上に展示されているものもガラスをはずして簡単に手に取って見られるようになっている。

3階にある第1、第2の二つの収蔵展示室は、一般には公開していないが、研究者あるいは特に熱心な見学者の希望があれば、いつでも案内してもらうことができる。この二つの部屋はその名の通り、単なる収蔵庫ではない。戸棚、ケースなどに通常の展示室より多量の品物が入っている点が異なるだけで、すべての品物を簡単に取り出すことができる点は、2階の展示室と共通している。第1収蔵展示室には、土器、染織品の他に、各種の金属製品、土器作製のための型、楽器や機織りの道具、さらには動物、植物などの自然遺物が分類整理されている。第2収蔵展示室には、492 cm × 135 cm の当館収蔵品中最大の布をはじめ、大きな染織品が木枠に収めて掛けられている。

V. 収 蔵 品

天野博物館の収蔵品としては、現在カードに登録、整理されているものとして、3026点の完形、準完形土器と、3321点の染織品がある。しかし、その他に未整理、未登録のものがかなりあり、また木製品が約100点、金属製品が約500点、その他多数の骨角貝製品、楽器、織物の機、石製品、装飾品、動物や植物資料、さらに10例の入墨のあるミイラの腕、94例の頭骨、数え切れない土器片を入れると、その数は2万点を越すと思われる。登録作業は進行中であるが、少ない館員が多忙な仕事の合間を見て写真撮影、計測などの作業を行うためなかなか捗らず、かえって新しい収蔵品がつつぎと増えている状態である。

これら多数の収蔵品の90%以上は、天野氏が最も力を入れて調査、研究をしているチャンカイ文化期のものである。しかし、中央アンデス先スペイン文化に関する博物館であるからには、その他の時期、地域のものも数は多くはないが、きちんと系統的に集められている。また、通常の収集家とは異なり、土器、染織品、金属製品、装身具などいわゆる骨董品の類の他に、当時の食料や染織の材料になった動物、植物資料までもその収蔵品の中に含まれているのも大きな特色である。

これらの中、2階の二つの展示室に陳列されているものは、141点の土器、47点の染織品、11点の木器、19点の首飾り、100点の金属製品の他、数例の楽器、羽毛製品、人形、キープ（計算あるいは記録に使われた一種の結縄）、その他小型の装飾品がいくつもあるにすぎない。ただし、第2展示室のケースの下には、290の引出しがありその中でも多数の染織品、人形、紡錘などが収められている。その他の収蔵品は、四つの収蔵庫と収蔵展示室に収められているが、現在収蔵品の数が増えすぎ、これらの場所だけでは収納しきれなくなっている。そのため一部は1階のガレージの通路や裏の住宅の屋上に、棚を作ったり箱に収めたりして積みあげられており、将来の収蔵庫の増設が望まれている。

本館の収蔵品の中のいくつかは、1958年のインカ帝国文化展を皮切りに、61年のインカ帝国黄金展、64年のコトシュ神殿秘宝展、71年の古代アンデス文明展、75～76年のインカ文明とミイラ展などの機会に日本各地で公開されている。特に、71年の古代アンデス文明展は、その出品物の大部分が本館の収蔵品であった。また、収蔵品の写真は、多くの美術全集その他の書物でも広く紹介されている【泉（監）1956；石田、泉（編）1959, 1965；AMANO 1961；泉 1962, 1964；泉（編）1964a, 1964b, 1970；飯山 1966, 1969；増田 1973；高山（編）1975；舩田 1976】。

この数多くの収蔵品の中で、天野博物館の名を高からしめているのは、なんといっても染織品の質と量である。その大部分はチャンカイ文化に属するが、前期 Horizon

のパラカス文化のものを始め、モチカ、ナスカ、ワリ、チムー、イカ・チンチャなど他の時期、地域のものも含まれている。これらの染織品の大部分は、いわゆるいざり機（後帯機、腰機、地機ともよばれる）という原始的な機を使って織られたものである。このタイプの機は、この地域だけでなく世界各地に分布しているが、中央アンデス先スペイン文化の染織品には、この機を使って製作可能な織物のほとんどすべてが見出されるという。すなわち、一般に正倉院、エジプトのコプトと並んで有名なインカ古代裂の中でも特に優れた綴織りをはじめ、紋織り、羅織り、紗、紹、浮織り、縫取り織り、二重織り、縫合せ織り、綾織りなどが知られている。また、織物のほか編物、組紐、刺しゅうも発達しており、縫編み、オープンワーク、レース、捻編み、結び節、結び編みなどの製品がみられる。紡ぎ、染色の技術もなかなか進んでいた。紡ぎはすべて簡単な棒と紡錘車を使った手紡ぎで、主として木綿、獣毛が使われた。時には現在のように品種改良の行われていない比較的短繊維の木綿を、髪の毛よりも細く紡いだ見事なものもある。染色は織りほど発展はしなかったが、絞染め、描染め、ろうけつ染めなどの技法が知られていた。絣染めもきわめて少数の例が現在までに出土しているが、本館の収蔵品の中にはみられない。

これらの染織品は、いずれも死者を埋葬する時にあの世への旅立ちの晴着としてつけられていたもので、短かい袖付きあるいは袖なしの短シャツ、膝までの長さの貫頭衣、ポンチョ、ふんどし、巻スカート、腰帯、頭に巻いた帯、頭に被った薄物のベール、肩掛け、袋、帽子などがみられる。その他に、オンダとよばれる投石用の紐、カーテンあるいは敷物と思われる大きな布類も知られている。この中で最も驚くべきものは、チャビン様式の文様が描かれたパラカスの織物（写真 7 左端）であろう。246 cm × 56 cm のこの一枚布は、いざり機の場合かならず見られる織終いのゆるみがなく、終始均一に織られており、この分野の権威であるニューヨークのアメリカ自然史博物館のバード Bird 博士をうならせたものである。その他の主なものとして、結び織りのチムー期の美しいシャツ（写真 Ia）、細かい手先の操作により織り出されたオープンワークの薄物（写真 Ib）、多色に染分けた絞り染めの布（写真 Ic）、各種の文様、技法を一枚の布に織り込んだいわゆる“見本織り”とよばれる布（写真 IIa）、綴織りで小さな人物や動物を織り出したもの（写真 IIb）、白色染料を使ったもの（写真 IIc）、ピロード状の帽子（写真 IId）などの他、密林地帯の鳥の羽を織り込んだ布、伸縮自在のエラスティックな帯などがあげられる。これらは、天野博物館の代表的な収蔵品であるが、その他に多数ある資料をみても、時期、地域により文様や色の組合せなどに差はあるが、技術的な面ではほとんど違いがなく、当時の染織技術の水準の高さには驚かされる。

土器の方では、ナスカの階段型土器（写真 IIIa）、モチカの舟を操る漁師を配した浅鉢（写真 IIIb）、ワリのラグビーボール形土器（写真 IIIc）など、おそらく世界

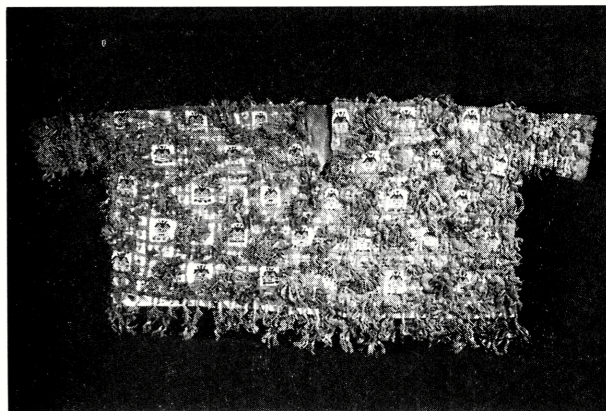


写真 Ia

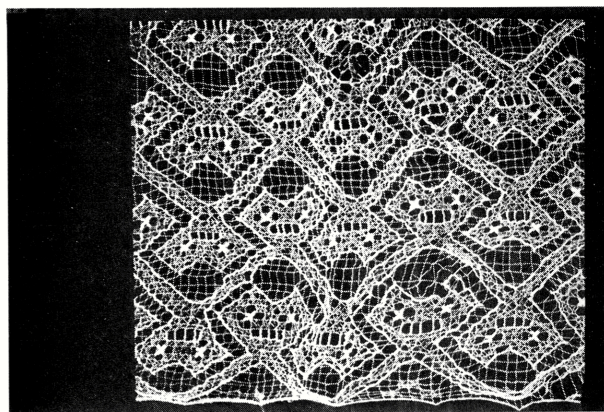


写真 Ib

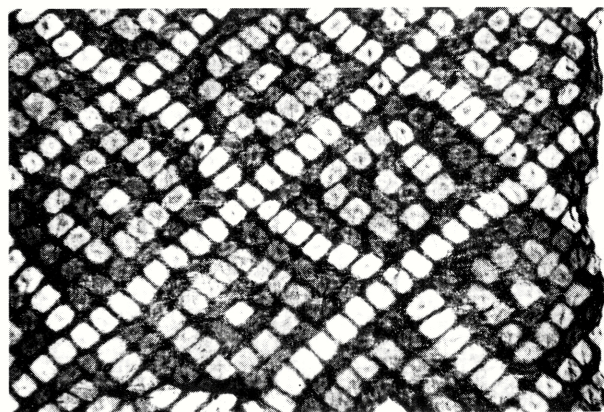


写真 Ic



写真 IIa

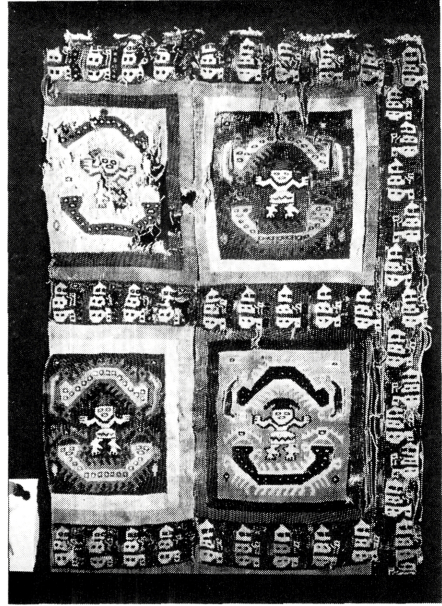


写真 IIb



写真 IIc



写真 IIc



写真 IIIa



写真 IIIb

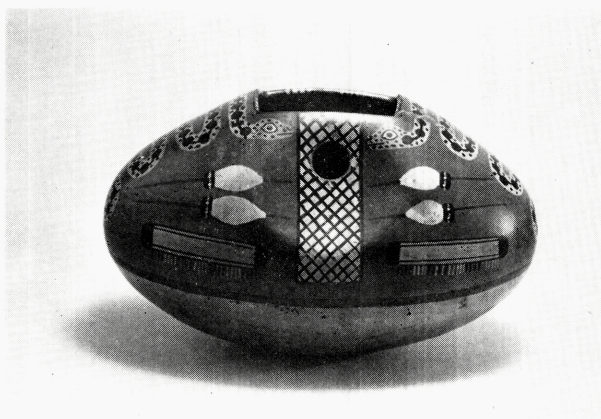


写真 IIIc



写真 IVa

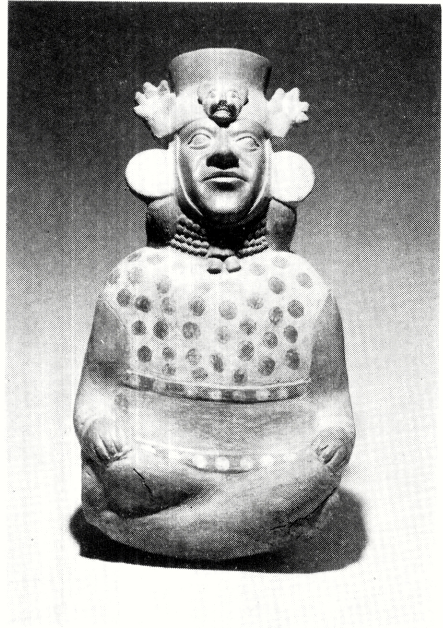


写真 IVb

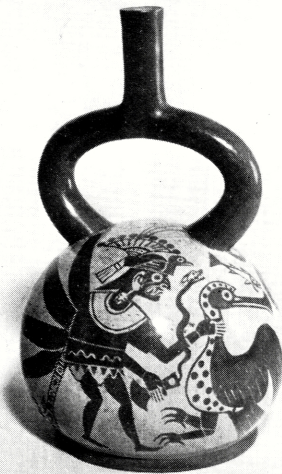


写真 IVc



写真 IVd



写真 Va



写真 Vb

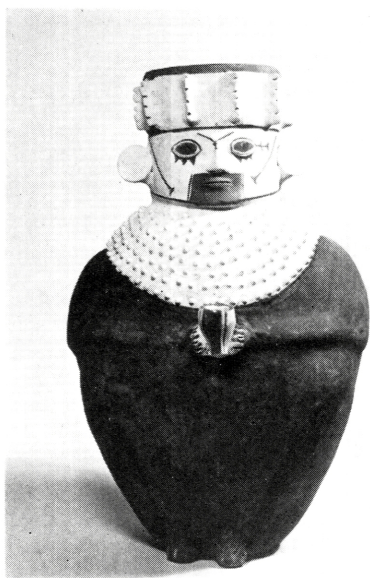


写真 Vc

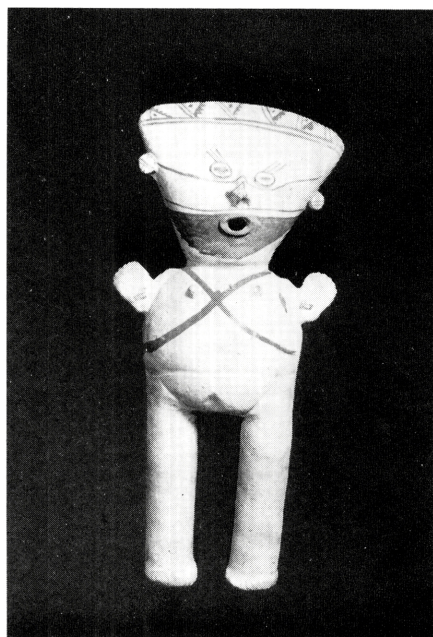


写真 Vd



写真 VIa



写真 VIb

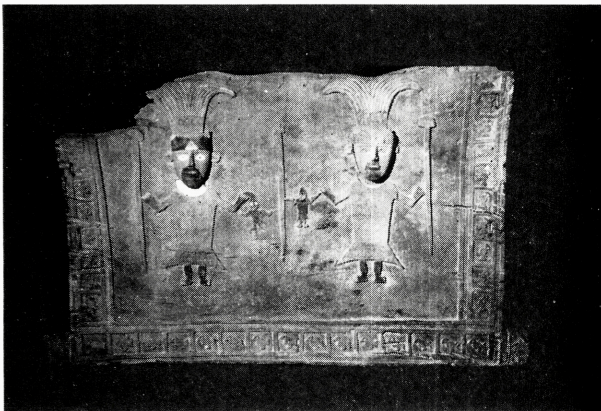


写真 VIc

で唯一の例と思われるものの他、チャビンのピラミッド型壺（写真 IVa）、モチカの大人物坐像壺（写真 IVb）、鵜飼いの情景を描いた鍔型壺（写真 IVc）、モチカ後期の農業と漁業を表した二重鍔型壺（写真 IVd）、チムー・インカの踏みすきを模した黒色土器（写真 Va）、チャンカイ三彩文化期の土製の面（写真 Vb）などが、本館収蔵品中の逸品として名高い。その他に、一つ一つは決して美しいものではないが、おそらく世界で最も多数のチャンカイの土器、特に約 500 点を数えるチナ China とよばれる人面付壺（写真 Vc）、クチミルコ Cuchimilco とよばれる土製の人形（写真 Vd）がある。また、俗に 5 人ばやしとよばれるチムー期の、楽器を奏する 5 個の人物象形壺（写真 VIa）は、それぞれ別に出土したものといわれるが 5 つ集められた様はまさに日本の 5 人ばやしに良く似ており、見る人に微笑をさそうものである。

染織品、土器以外のものの中では、婚礼の宴の情景を表したといわれる、家の中に入った人形（写真 VIb）、世界で本館とリマ市の黄金博物館にしかない木製の輿の背当て（写真 VIc）など、すでに書物にも紹介されて有名なものの他、孔の径 0.19 mm の極少のビーズ、専門家でもその製作法の解らないチムーの鋳物製装飾品、金製の釣針など当時の技術水準の高さ、豊かさを示すものがある。珍しいものとしては、竹、木綿、獣毛で作られた戦闘用のヘルメット、皮製のサンダル、皮に描かれた絵の断片、計りとおそらく計りの重りとして使われたと考えられる鉄、鉛、石製の小球、料理用のあくすくい状の曲げた木枠に網をはったもの、木製の素朴な人形など、他の博物館ではあまり見られないものが収蔵展示されている。

今までしばしば触れたように、本館収蔵品の大部分はチャンカイ文化期のものである。そのほとんどが副葬品であるという一定の条件はあるが、そこには当時の生活用具あるいは信仰、祭祀用具の多くがみられると考えてよいであろう。衣服、装身具などの染織については前にも触れたが、天野氏によれば数多くの出土品にその差はほとんどなく、いずれも質の高いものであるという。チャンカイ文化の政治社会組織については、同時代の北のチムー、南のチンチャほど良く解っていない。チムー王国におけるチャン・チャン Chan Chan、チンチャ王国におけるラ・センチネラ La Centinela のような大政治宗教センターであった遺跡は、中部海岸には知られていない。副葬品に差がみられないということが、大遺跡のないことともあわせて強大な権力の集中した政治機構のなかったことを示すのか、あるいは当時の全般的な技術水準の高さを示すものかについては、副葬品以外の調査、研究の進んでいない現在、将来に残された課題の一つであろう。

土器、土製品についても、前半は白地に赤、黒彩のいわゆる三彩土器が主で、後半は白地黒彩になるが、いずれも素朴なものである。副葬品としては、球形で短頸の壺、皿、コップ形土器など日常生活に使われたものの他、前述のチナと俗称される人面付壺が最も特徴のあるものである。この壺は一つの墓から 1 ないし数例出土する。大部

分は手に小さな盃を持っており、顔はさまざまな文様で彩られている。この小盃に見合う実際の盃も出土しているが、これも天野氏によれば、通常小盃を使用するのはアルコール分の強い酒を飲むための場合が多く、チャンカイ文化期にすでに蒸留酒の製造法を知っていたのではないかと考えられるという。その他、皿類には波形、階段、十字などの文様が彩色されたり、型による浮出し文が施されている例が多いが、これが単なる幾何文様として片付けて良いものか、あるいはそれぞれ何らかの意味を持っているものかどうか、重要な研究課題の一つであろう。その他の資料も豊富にかつ一般的に収蔵されているため、チャンカイ文化研究のためには、天野博物館の収蔵品の調査、分析はその第一歩ともいえる重要な仕事といってよいであろう。今回の調査は、他の調査の整理もあり、また染織品や自然遺物などのように、その方面の専門家の協力が不可欠なこともあって十分には行えなかったが、近い将来に再度じっくりと調査、研究を行いたいと思っている。

Ⅵ. 研究活動その他

天野博物館独自の研究として、館長の天野氏自身によるチャンカイ文化の研究、および中央アンデス文化の文様の研究がある。チャンカイ文化の研究は、チャンカイ川流域に散在する遺跡の分布図作製にはじまり、現在までにその他の川の流域も含めて25カ所の遺跡で発掘調査が行なわれている。またその他多くの遺跡で表面採集、調査を行ない資料を収集している。その結果、それぞれの遺跡の性格を解明し、また出土遺物の整理を通じてチャンカイ文化の人びとの生活、技術を研究しているが、残念ながら天野氏はアマチュアである事を自認しており、これまでの調査、研究で蓄積された知識を書くことを好まない。ただ、博物館を訪れる人たちに、情熱をこめて自身の考えを語られるにすぎない。文様研究の方も、遺物収集と同時に始めていた。しかし当初はこんなことをして何になるかと弱気になったこともあったが、1957年ちょうどペルーを訪れていた渋沢敬三氏に励まされ、その後も倦まず弛まず研究を継続している。この研究は主としてチャンカイ文化の土器、染織品に表された文様を中心に進められているが、参考例としては、中央アンデス地帯諸文化のみならず、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカと全世界のものを意欲的に集め、研究の内容を高める努力を行っている。現在、鳥を表す文様を主に、29冊の透明ファイルと1冊のアルバムにコピーした資料がぎっしりと詰っている。その他、自身お酒を少しようたしなむためか、「アンデス文明の酒道の研究」と称して、酒盃、酒壺、あるいは酒を飲む人物を描いたものや象った土器などに基づいた研究も行っている。ともかく、天野氏の学識の幅、深さは限りがなく、考古学者あるいは織物の研究家はもちろん、天野氏の専門でもあった漁業関係をはじめ、植物学、動物学、農業工学、医学、都市工学その他の研究者

たちもかならず何か教えられる所があるという。

天野博物館の研究活動のもう一つの大きなものとして、内外の南米研究者の拠点としての役割りがあげられる。現在までに、1958～69年の間5次にわたった東京大学アンデス地帯学術調査団、1975年の核アメリカ（中南米）調査団の二つの人類学、考古学調査団をはじめとし、地理調査団、植物調査団あるいは都市工学、医学調査団などが天野博物館の有形、無形の世話になっている。特に東大アンデス調査団の場合は、その成立のきっかけが1955年の故泉靖一氏と天野氏とのペルーでの出会いにあったという因縁もあって、5次にわたる調査期間中に全面的に世話になり、器材や遺物の保管あるいはその整理のための場所の提供を受けている。また、古くは近畿大学の松井佳一、松本巖両氏をはじめ、中島章子氏、角山幸洋氏、柏木希介氏、Shiraki Hiroya 氏等の日本人、あるいは Rosa Furg Pineda, M. K. Hodnett などのペルー人が、本館の資料に基づいて論文を発表している [松井、松本 1960; 中島 1970; 角山 1973a, 1973b, 1974; SHIRAKI n. d.; KASHIWAGUI 1976; FUNG PINEDA 1959; HODNETT 1976]。その他に染織品の研究家として名高い山辺知行氏、吉岡常雄氏の他、前述の石原嬢のようにはるばる日本や欧米諸国から来訪する研究者も数多く、これらの人びとを心良く受け入れ、収蔵品の自由な研究の場を提供している。

天野博物館の活動の一つとして、俗に天野教室といわれるものがある。これは在留邦人あるいは当地に進出している日系企業の家族を対象とするもので、通常月に一度館の講堂で講義をするか、あるいは他の博物館や、附近の遺跡の見学を行っている。講義は天野氏自身が行う他、日本より来館する学者にも依頼して行われている。その他、本館の収蔵品を使った出版物はもちろんのこと、ポスター、カレンダー、絵ハガキ等のための写真撮影にはできるだけの便宜を図っている。特に研究者の場合には、無償でその写真の使用を許可している。

VII. お わ り に

以上、中央アンデスのチャンカイ文化研究の第一歩として、この文化の資料を多数収蔵している天野博物館の創設の経緯、展示、収蔵品、研究活動その他について述べ、その形態、内容を一通り紹介して来た。チャンカイ文化研究はまだその緒についたばかりであり、さまざまな問題が課題として将来に残されているが、この機会を利用してチャンカイ文化の真の発見者ともいふべき天野芳太郎氏とその博物館についてもう少し述べさせて頂きたい。

天野博物館の真髄は、決して完備した建物、充実した収蔵品とその展示構成といった表面的な点にあるわけではない。この博物館を世界でも指折りのものの一つとって良いものまでにしたのは、ひとえに天野氏の持つ中央アンデス先スペイン文化に対

する尊敬と愛情であったといつてよいであろう。この気持ちを一人占めにせず、できるだけ多くの人びとも知ってもらいたいという心が、建物に、展示に反映し、また見学者に対する説明の中にもにじみ出ている。そのためここを訪れる人びともその心が伝わり、おのずから評判をよぶようになったのである。創設の経緯でも述べたように、天野氏は事業家として戦前、戦後の二度にわたり裸一貫から成功した人である。しかし、事業で得た利益をすべて、若い頃からの夢であったアメリカ古代文化の調査、研究、遺物の収集に費し、このように立派な博物館を創り上げたのである。

今日、日本人の海外進出は眼をみはるものがある。しかし、その活動のほとんどすべては企業、商社を主とした経済活動であり、あるいは宗教団体による布教活動である。文化、社会的な面といえば、政府の後押しによる官製のもの、あるいは華道、茶道、柔道、歌舞伎や能といった日本古来の伝統文化の紹介にとどまるといってよい。一方、戦前、戦後を通じて日本人が外国の文化を取り入れる勢いは驚くべきものがあり、有名なオーケストラ、オペラに始まり、絵画、彫刻、美術考古品などは日本に居ながら見たり聞いたりできる。また国外のものを收藏、展示している博物館、美術館も数多くある。その中で、外国の文化を日本人が現地で紹介しているという例は、おそらく天野博物館をもって唯一の例とするのではあるまいか。天野博物館は、天野氏の20年以上にわたる現地での調査研究の成果を示すものであり、そこに収められたチャンカイ文化の染織品の評価は世界に広く知られている。このことは、天野博物館という名は、最近になって2、3の旅行ガイドブックに出るようになったが、それまでは一般に広く知られているとはいえなかったにもかかわらず、昨年中に世界50ヶ国から多くの人びとが訪れていることから判るであろう。日本人の場合、団体旅行のスケジュールの一つとして来館する人が多いのに反し、諸外国の人びとはこの博物館の評判を聞き、自らの意志で来る人が多い。このことはとりもおさず、諸外国の人びとが天野博物館を通じて、日本人が外国の文化に示す理解と愛情、日本人の文化的資質の高さを認める場ともなっているといえよう。それと同時に、前述の日本での数回の展覧会への出品をはじめとして、ペルー国内で催される各種の展覧会はもちろん、これまでにアメリカ合衆国、フランス、西ドイツ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンなどの各国で開催された展覧会に收藏品を出品し、ペルーの古代文化の紹介に努めている。

館長の天野氏は、本年78才という年齢にもかかわらず、連日調査、研究、および見学者のための展示品解説の活動を続けている。特に、天野氏が自ら収集に当たった展示品の解説には、まるで我が子をいつくしむかのような愛情がこもっており、おそらくそれを聞いたすべての人が感動を覚えるであろう。また、国内外の研究者、愛好家には進んで資料を全面的に公開し、その研究に協力を惜しまない態度には、全く頭が下がる思いがする。

1974年の財団法人化により、本館が天野氏の名と共に永遠に存続することが法的に可能になったのは実に喜ばしいことである。願わくば、その裏付けとなる資金的な面での保証、あるいは天野氏の後を継いで中央アンデス先スペイン文化の研究に情熱を傾ける人が続くことを希望するのみである。

文 献

天野芳太郎

- 1936 『あちろちろ物語』 誠文堂新光社。
- 1940a *En la America Latina*, Imprenta Panama, Panama City.
- 1940b 『中南米の横顔』 朝日新聞社。
- 1943a 『パナマ及びパナマ運河』 朝日新聞社。
- 1943b 『南米の古代文化に就いて』 日秘協会。
- 1943c 『中南米先住民族の文化』 愛知県商工館。
- 1943d 『我が囚はれの記』 汎洋社。
- 1943e 『中南米事情』 東洋経済新報社。
- 1944 『アラウカノ族の如く』 汎洋社。
- 1948 『中南米の表情』 大日本雄弁会講談社。
- 1961 *Huacos Precolombinos del Peru*. Bijutsushuppan-sha, Tokyo.
- 1975 「私とペルー古代文明」『インカ文明とミイラ展』 読売新聞社。

FUNG PINEDA, ROSA

- 1959 Análisis tecnológico de once encajes del Antiguo Perú; Período tardío. *Trabajo presentado a la Mesa Redonda de Ciencias Antropológicas de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos*, enero, 1951, Lima.

舩田 圭子

- 1976 『ひとりごつインカ』 柏書房。

HODNETT, M. K.

- 1976 *Técnicas en el arte del Antiguo Peru*, Lima.

飯山 達雄 (写真), 角山 幸洋 (解説)

- 1966 『インカの織物』 朝日新聞社。

飯山 達雄 (写真), 寺田 和夫 (解説)

- 1969 『インカの秘宝』 読売新聞社。

石田英一郎, 泉 靖一 (編集)

- 1959 『世界考古学大系 15, アメリカ, オセアニア』 平凡社。
- 1965 『古代アメリカ』 講談社版世界美術全集 23 講談社。

泉 靖一 (監修)

- 1956 『インカ——昔と今——』 岩波写真文庫 197 岩波書店。

泉 靖一

- 1962 『プレインカの織物第1号, チャンカイ古代裂図録』 美術出版社。
- 1964 『アンデスの芸術』 中央公論美術出版。

泉 靖一 (編集)

- 1964a 『プレインカ服飾図録』 三一書房。
- 1964b 『プレインカ秘宝図録』 三一書房。
- 1970 『インカの遺蹟』 世界の文化史蹟 別巻 講談社。

KASHIWAGUI, Maresuke

- 1976 An Analytical Study of pre-Inca Pigments, Dyes, and Fibers, *Bulletin of the Chemical Society of Japan*, 49(5): 129-134.

増田 義郎

1973 『古代アメリカ美術』大系世界の美術 第7巻 学習研究社。

松井 佳一, 松本 巖

1960 「ペルー国における漁網について」『近畿大学農学部紀要』1。

中島 章子

1970 「アンデスの染織物の構成要素について」『民族学研究』35(2) : 148-153。

SIRAKI, HIROYA

n. d. *Similarity between Andes or Incan Civilization and Japanese.*

高山 智博 (編集解説)

1975 『マヤとインカの美術』グランド世界美術 第7巻 講談社。

角山 幸洋

1973a 「アンデスの染織文化」『染織と生活』1973年(2)。

1973b 「アンデスの紋織」『愛泉女子短大紀要』8 : 1-12。

1974 「続アンデスの紋織」『愛泉女子短大紀要』9 : 1-10。